

## 隅田川流域における料亭と水辺の係わり方に関する研究 土地利用の変遷と空間特性に着目して

A study on relationship between Japanese restaurant in the Sumida River basin and water  
Focusing on the change of land use and spatial characteristics

○並川茉央<sup>1</sup>, 畔柳昭雄<sup>2</sup>, 坪井塑太郎<sup>3</sup>

\*Mao Namikawa<sup>1</sup>, Akio Kuroyanagi<sup>2</sup>, Sotaro Tsuboi<sup>3</sup>

Abstract: : Need to review the objectum of the strong connection between water and land for future urban regain new appeal period water and space. So restaurant located in Sumida River basin from the Edo period in the present study, which tried location characteristics and temporal characteristics along with the change of land use. As a result, considered being lost along with the loss of environmental concern the river restaurant means restaurant located on the river landscape more than recreational features importance was that. And waterside and could take various forms can directly or indirectly pertaining to the Sumida River.

### 1. はじめに

近年、都市河川とまちとの繋がりが希薄になってきている。こうした中、広島や大阪では「水辺の社会実験」を通して水辺との係わりを高める取組みがなされ、東京でも同様の取組みが始められた。一方、江戸期から昭和初期にかけての東京は「水の都」と呼ばれるほど多くの水路が存在し、隅田川を始めとする河川は文化や経済、生活の中心として位置づけられていた。その痕跡として、現在でも河川・運河の水面に正面を向けた建築物が存在し、かつての都市活動が水辺空間で展開されていたことが分かる。しかし現在、都市河川整備が進む中水辺空間は画一化されつつあり、今後の都市空間に新たな魅力を取り戻すためには、「水と陸」の二元的都市構造であった時代の水と建築空間の係わり方を見直す必要がある。そこで本研究では、江戸・明治・大正・昭和初期において河川沿いに立地する料亭を対象に、土地利用の変化と共に立地特性・空間特性の観点から見ていくことで、今後の水と建築空間の在り方に対する計画的示唆を得ることを目的とする。

### 2. 調査概要

隅田川流域、築地から浅草の江東区・中央区・台東区・墨田区の4区を対象地とし、文献調査により土地利用の変遷及び料亭の分布・形態を捉え考察を行う。そこで、空間特性として飲食・芸妓・建物や庭を楽しむことの出来る空間を有する河川沿いに立地する料亭を対象とする。

### 3. 隅田川流域の料亭の分布と土地利用の変遷

Table1 に隅田川流域、築地から浅草における江東区・中央区・台東区・墨田区の土地利用の変遷を示し、Figure1 に本研究で捉えた料亭の分布を示す。

### 3-1. 「水の都」の形成と料亭の出現

隅田川流域周辺は、江戸初期から狭い市街地での河川・内水面・海上の水上輸送網を広域化するため、浅草から佃島にかけて陸地を広げてきた。これは1657年明暦の大火以降の再建事業に伴う市街地の造成、水上輸送による生活物資の供給や大市場との中継市場として、水上網が経済的に重要性を増したことにある。さらに参勤交代を通じた江戸を中心とする人の往来は江戸へ盛んな文化の伝播をもたらし、観光客の増加と共に河川沿いに立地する建築物の中には、水辺を活用した料亭も出現するようになった。

### 3-2. 土地利用の変化が料亭に与えた影響

1657年から1872年にかけて水上運搬が主流となり、昭和初期までは運河の開削が多く行われていた。吉原や柳橋界隈の歓楽街周辺の隅田川沿いには多くの料亭が立地しており、このころ浅草・吾妻橋周辺には9軒、両国・柳橋周辺には13軒、十五間川開削後深川八幡宮周辺には5軒、中洲に1軒、築地に1軒立地していたことが確認できた。これらの料亭では、料亭から舟を漕ぎ出し隅田川を向島の方へ上る納涼や両国と柳橋を行き来し江戸観光などの行楽や余暇活動も行われていた。しかし1872年の鉄道開通や1914年の第一次世界大戦以降徐々に内陸水運が低下した。その後復興事業により陸上交通が主流となり始め、震災や戦災では鉄道の復旧に時間が要したため、度々水上交通が復旧するものの河川の荒廃からあまり活用されず水路や河川は残土廃場となっていた。そして1939年以降は河川の埋め立てが加速し、水辺の多くは公園や陸上交通網、へと姿を変え、高度経済成長期には工場等の排水による水質汚濁が問題となった。その後1959年に起きた

1 : 日大理工・学部・海建、Nihon Univ. 2 : 日大理工・教員・海建、Nihon Univ, Dr Eng

3 : 日大理工・教員・海建、Associate Prof, CST, Nihon Univ, Ph. Dr Urban Science

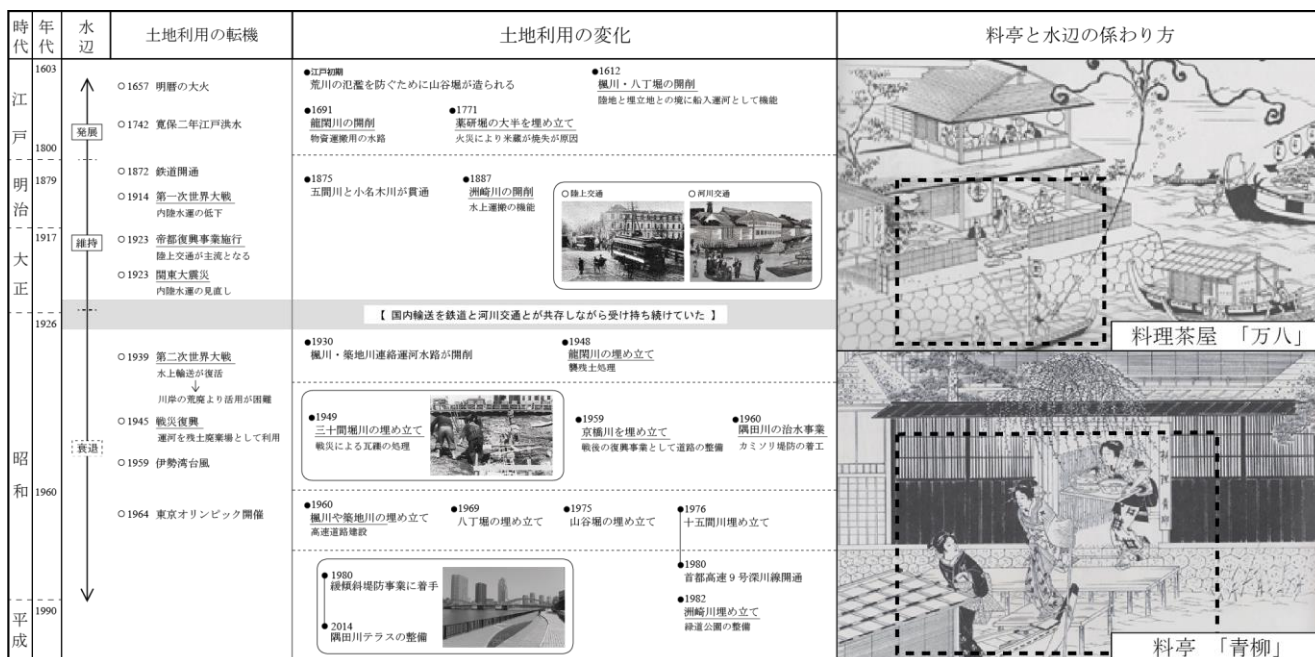


Figure1. forms of Sumida River Watershed land use changes and the Japanese restaurant

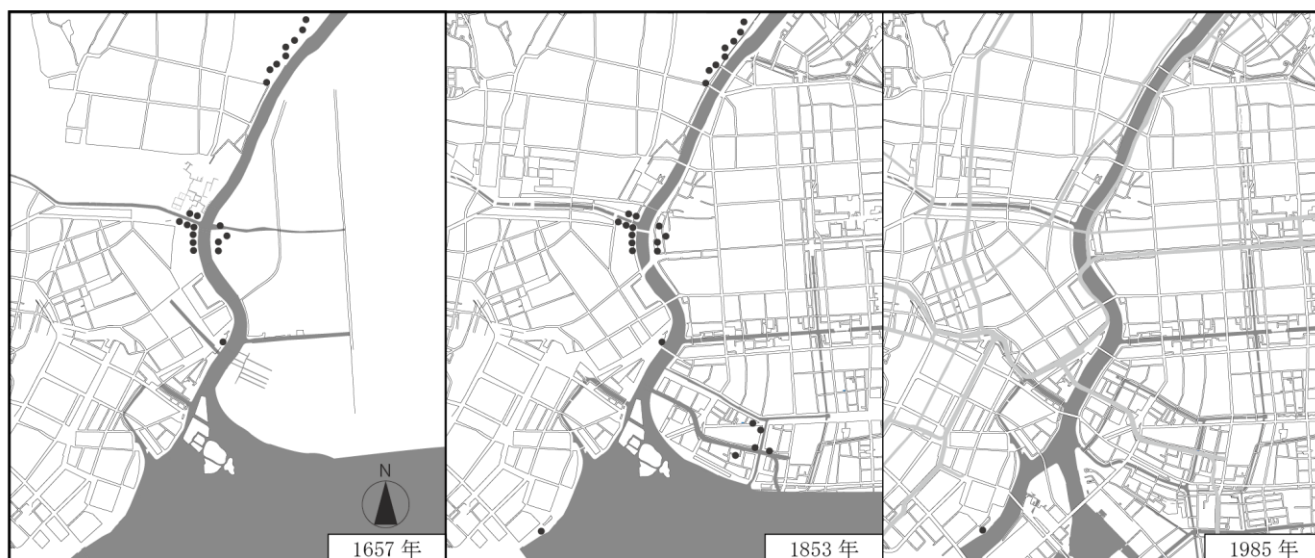


Figure1. Japanese restaurant distribution map

伊勢湾台を機に水害対策として 1960 年より隅田川沿いに防潮堤建設が行われ、河川沿いに建ち並んでいた料亭は水辺との繋がりが切り離されたことにより姿を消した。こうしたことから、河川と親密に係れる環境が失われることは河川沿いに立地する料亭の魅力の喪失に繋がった。

#### 4. おわりに

本研究の結果、江戸期から河川沿いに多数立地してきた料亭は、隅田川の水景などの水辺の魅力を多様に取り入れた建築形式によりつくられてきた。そのため、水辺に廊下を回したり、開口部を水に向けるなどの工夫の他、渡し舟の利用や棧橋、飛び石など河川側からの出入りについても工夫が図られ、水辺立地における環境を最大気活に活用していた。こうした親水性に配慮

した建築であったため、近代に入り水際に護岸が設置されることで、隅田川沿いに立地する魅力を失った料亭は、次第にその数を減らすことになった。

都市化の流れの中で水辺空間の活用がなされてきているが、親水至上主義にならず、新たな水辺との付き合い方を考慮した整備が望まれる。

#### 5. 参考文献

- [1] 渡邊實:もち歩き江戸東京散歩,pp30-102,2008
- [2] 富士昭雄.麻生磯次:西鶴置土産・萬の文反古,pp88-94,1977
- [3] 国書刊行会:鼠璞十種,vol2,1978
- [4] 近藤和吉:明治大正東京散歩,pp88-115,1978
- [5] 渡辺泰啓:江戸買物独案内,pp346-357,1972